おしかったのは、二本とも小手を打った後、剣先で床をたたいた行為は、気持ちは十分わかるけれども、範士の残心の取り方には、首をかしげたくなるような品格の問題に触れそうな気がしてならなかった。

中学校に正課として剣道を取り上げる時代に、真の指導者が不足するのは目に見えているようだ。鹿児島県の剣道家はもっと全国の剣道を見て、自分の剣道と真摯に向き合い、取り組んで欲しいものだと感じた京都大会であり、十年一昔の愚感として記してみただけである。

＊筆者は昭和二十七年鹿児島の青年団で剣道を始める。昭和五十三年から三十一年間に亘り少年・一般剣士を指導。薩摩川内市剣道連盟会長を七年間勤める。平成二十一年十月、薩摩川内市市制施行五周年記念・社会体育功労賞を受章。編集子がいつ川内の道場にお邪魔しても必ず一番に道場に来られ、最後まで精力的に元に立って遣われる「稽古の虫」である。連盟の剣士指導と共に生涯剣道を率先垂範されている。

合掌。

百日紅（さるすべり）

俳句結社「火の島」同人　上薗　猛

（鹿児島県薩摩川内市剣道連盟会長　六十四歳）

庭先に揺れる真紅の百日紅の花を眺めていたら、突然遠い昔の記憶が昨日のことのように鮮明に蘇って来た。勤務校剣道部の部員八名と一緒に真夏の甑島（鹿児島県）を訪れた三十数年も前の出来事である。

「島の農協研修所が、ただ同然の格安料金で使用出来ますよ。」

部員の士気高揚と意識増進を目標に強化合宿を検討していた私の元に、甑島の小学校に勤務する知人からありがたい一言が飛び込んで来た。研修施設はガスコンロ付き流し台はもちろん鍋釜から食器類に至るまで全て完備しているとのこと、私が「渡りに舟」と飛びついたのは申すまでもない。四月の赴任と同時に休部中であった部活動を再開したばかりで、まだお世辞にも高校剣道部とは言えぬ状態ではあったが、自分なりの夢と目標を定めて日々真摯な取り組みを続ける我が愛すべき部員達の心に強烈に焼きつくようなドラマチックな合宿をと模索していた私にとっては願ってもない好条件、一も二もなく予約を依頼した訳だが、残念なことに三度の食事が自炊に頼るしかなかった。赴任後に一本釣りで集めた部員は二年生が一人いるだけで残り七名は全て一年生、しかもう

ち三名が高校入学後に竹刀を手にしたばかりの素人剣士、自炊などしていては合宿の目標達成など絶望的と思い悩んでいた私に、まだ子供のいなかった妻が自ら炊事係を申し出てくれ、私たちは大きな夢と希望を胸に心躍らせながら甑島に乗り込むこととなったのである。

素人の集まりと表現しても過言ではない弱小チームであったが、高校のない島での高校運動部強化合宿は異例の出来事であったようで、少年剣士はもちろん、柔道・バレーボールの部員やその保護者等、連日多くの見学者が会場を訪れて熱い視線や励ましの言葉、果ては差し入れまでして下さるありがたさであった。指導する私も自然と力が入ってフル回転、一日三回八時間に及ぶ（その時の子どもたちにとっては）過酷な活動メニューに口では弱気な発言に終始している部員達も、本心ではまるでその過酷さを楽しんでいるかのように喜々とした表情で稽古に食いついてくれたのである。

「奥様はどうぞ私の家に寝泊まりしてください。」紹介してくれた女教師の善意にすがりながらの合宿ではあったが、体力・技量面の向上はもちろん、部員間の結束力強化、指導者と部員の信頼関係確立など当初の目標を遙かに上まわる素晴らしい成果を上げ、不慣れな子どもたちにとっては長すぎるかもとの私の危惧も杞憂となって、最後まで一人の落伍者も出すことなく予定した五日間の日程が瞬く間に経過したのである。

最終日、全員整列して一礼しお世話になった中学校を後にしたのだが、真夏というのに潮風が妙に心地良く、校門脇の民家に静かに揺れる紅白の百日紅の花がこの上なく美しく感じられた。「おい、みんな、秋の地区大会ではきっと念願の初勝利があげられるぞ。この五日間で来た時の数倍もの力をつけたおまえたちのことを、めでたい紅白の百日紅が笑顔で見送ってくれてるじゃないか。これ以上縁起の良いことって、ほかには無いと思うぞ。」

今振り返ると恥ずかしくなるほど気障な台詞だったのだが、あの時の部員たちは一人として白ける者もなく、笑顔で実に素直にそして心から喜んで私の言葉を受け止めてくれたのである。

剣士等のまなこキラキラ百日紅　猛

この時の私は、迎える二ヶ月後の川薩地区高校秋期剣道大会で子どもたちからとてつもなく大きな感動をもらうなどとは想像だにしていなかったのだが、大会当日、十代の子どもたちの秘められた可能性と爆発力の大きさを改めて実感させられる結果となった。

接戦となった緒戦で待望の初勝利を上げた子どもたちは二戦二勝で予選リンクを突破して勝ち上がり、準々決勝、準決勝と試合が進むごとに進化を遂げながら、何と団体戦・個人戦とも準優勝の栄冠を勝ち取ってしまったのである。

渾身の面一本や秋気澄む　猛

「剣道人口の減少に思う」

天草市五和町　剣道教士七段（上天草市立今津小学校長）　泉　眞喜夫

現在、剣道愛好家や少年剣道指導者の共通する悩みは、剣道人口の減少であろう。これは少子化の影響もあろうが、青少年の剣道離れが大きな原因であると思われる。

では、なぜ子どもたちは剣道に対して魅力を感じないのであろうか。なぜ剣道を我が子にさせようという親が少なくなったのだろうか。

まず、サッカーや野球等、他スポーツ人気の高騰があると思われる。私の少年時代は、ONの全盛期で男の子の人気スポーツは野球であったが、サッカーは、体育の授業で習う程度で、まだマイナーなスポーツであった。ところが最近は、Jリーグのゲームがテレビで放映され、ワールドカップ出場で日本中がサッカー人気で盛り上がっている。一時、サッカーに押され気味だった野球もイチローや松井、松阪などの日本人大リーガーの活躍などで、また人気を盛り返し、日本の少年たちの人気スポーツは野球かサッカーに二分されるようになった。そのため必然的に剣道をしようとする少年たちの数が減ったものと思われる。

次に、きついことや厳しいことに挑戦するより、楽なことや楽しいことを好む子どもたちが増えたこと、そして、我が子にはきついことや苦労をさせたくないという親が増えたことも原因として挙げられる。剣道は、礼儀に厳しく、基本練習はきつくて、やっていて楽しくはない。その上、防具以外の部位をたたかれると痛い目にあわなければならない。子どもたちは、広いグランドで楽しそうにボールをちょうど八年目のことであった。

駆け引きも媚びも無き笑み　梯梧燃ゆ　猛

＊筆者は高校の国語教師として教鞭を取り、長年赴任先々の剣道部指導に携わって来られ、数々の剣道人を育成して来られた。編集子は高校三年時の最初の不肖の弟子である。

不審者から児童の命を守る「用心棒」を構える私

何の教育理念も専門知識も持たぬまま教育現場に飛び込み、情熱だけしか取り柄のなかった二十二歳の私に対し、驚異的と表現しても良いほどの奇跡の快進撃を演じ続けて、部活動指導への意欲と楽しみを植え付けてくれた小湊克法君（現、天草剣道連盟・益田克法氏）をはじめとする鶴丸高校剣道部員との出会いから、